

論文

西洋製古地図に見る尖閣諸島

The Senkaku Islands in Old World Maps to 19th Century

班 偉¹⁾

Han I

キーワード：尖閣諸島、釣魚嶼、西洋製古地図、海図

Key Worlds: The Senkaku Islands, Daoyu Yu, Western Old Maps, Sea-Chart

はじめに

尖閣諸島の領有権を主張するに当たり、中国・台湾側が提示した「歴史的証拠」の中に、自国の史料や輿図を除いて、19世紀西洋人が製作した地図も幾つか含まれている。例えば、鄭海麟著『釣魚台列嶼——歴史與法理研究』（明報出版社、2011年）下編では、「第四部分：明清時期西洋人所繪釣魚台列嶼地圖考釈」との一章が設けられ、七点の地図の紹介があり、うち「CARTE DES ILES FORMOSE」（フランス・1809年）と「Colton's CHINA」（アメリカ・1859年）の彩色図版口絵が見られる。また、劉江永著『釣魚島列島帰属考：事実与法理』（人民出版社、2016年）は、第三章「甲午戦争前欧州地図文献証明釣魚島列島属于中国」において、十数点のフランス・イギリス・ドイツ製地図を取り上げ、口絵に「A NEW MAP OF CHINA」（イギリス・1801年）と「Coast of China between Formosa Island & Pi-Chi-Li Gulf : Eastern passages to China and Japan」（イギリス・1867年）の彩色図版を掲載している。二人とも当局の立場を代弁する論客で、国務院報道弁公室の白書『釣魚島是中国的固有領土』（2012年9月）も同図に言及している。例によって、論客も当局も始めから史実に基づいて論証するつもりはなく、結論ありきの自己主張を展開するための手段に過ぎない。本稿では、中国・台湾側の持論の当否を検証した上で、尖閣諸島が16～19世紀西洋製地図の上で、どのように扱われていたかを考察していきたい。

一、西洋製地図における尖閣諸島の描き方

古地図には、それが作られた時代の地理的情報が詰め込まれており、当時の人々が考えていた世界像が反映されている。16世紀の西ヨーロッパでは、大航海時代の開幕に伴って、世界地図・海図の需要が年々増え、製作・出版事業も本格化した。それ以来、西洋人が製作したアジア地図の種類は星の数ほどあるが、尖閣諸島を描いたものと言え、極僅かで、例外と言っても過言ではない。国務院白書は四種の西洋製地図を取り上げ、領有権主張の

¹⁾山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

根拠としているが、「似て非なり」ものだ。先ず、「CARTE DES ILES FORMOSE」（フランス・1809年）について見てみよう。中国側は、「釣魚島・黄尾嶼・赤尾嶼の着色が台湾と同じ」であることを理由に、「製図者は三島とも台湾の附属島嶼とと思っているからだ」と断言するが、牽強附会の言も甚だしい。

この地図の出所を辿っていくと、国務院白書は鄭海麟の本から、鄭海麟は『先民的足跡——古地図話台湾滄桑史』（許雪姬・呉密察等編、南天書局有限公司、1991年）から孫引きしたことが分かる。地図の表題は、「Cart des Iles Formose, Madjicosemah et Lieu-kieu, avec une Partie de la Chine, des Philippines et du Japon」（台湾・宮古島・琉球・中華部分地域・フィリピン及び日本図）といい、19世紀前半のパリで地図出版業を営むラピエ兄弟（Pierre Lapie、1779～1851。Alexander Emile Lapie、活動期1809～1850）により、1812年に発行された『Atlas Classique et Universel』（世界古典地図集）所載の一枚である。図面を確認すると、台湾と宮古島の北に尖閣諸島と思しき島が三つ描かれており、うち二つの名称表記に I.Hoan-uey-su（黄尾嶼）、Rache（赤尾嶼）と辛うじて読み得る。地図の色分けとして、台湾は黄色に塗られ、輪郭が赤い線で囲まれている。日本・琉球・宮古島は同じく黄色だが、中国全体は白っぽい、海岸沿いの部分が緑線で縁取られている。ちなみに、地図の下部に僅か頭を擡げているフィリピンは薄い紫色を施されている。肝心の尖閣諸島と言えば、澎湖列島と同様に赤みがかっているのに、「台湾と同じ色」ではない^①。そもそも、台湾と中国本土が異なる色に塗られたこと自体、「台湾は中国固有の領土」という中国当局の公式見解と行き違い、況や I.Hoan-uey-su、Rache には「中国領」ないし「台湾領」といった注記が一切付いていないのだ。

ラピエ兄弟が1829年に発行した『Atlas Universel de Geographie ancienne et moderne』（世界地図帳）と見比べれば、問題の所在は一層明確になる。その中に「Cart de L'Empire Chinois et du Japon」（中華帝国及び日本図）があり、釣魚嶼と思われる I.Tiaoyu-su が描かれた半面、I.Hoan-uey-su も Rache も欠落している^②。この地図では、中国・琉球・台湾・釣魚嶼及び周辺島嶼の形状を見ると、前図とよく似ており、全体無色で、それぞれの輪郭だけが同じピンク色の線で縁取りされている。つまり、同じ製図者でも、作品によって島名表記があつたりなかったりして、着色も異なるため、地図の色分けだけに拠って島の帰属を決め付けるのは無理がある。

次に、「Colton's CHINA」（アメリカ・1859年）を取り上げたい。この地図について、中国側は「釣魚嶼・黄尾嶼の名称は中国語の発音で表記され、清朝の版図に属することを示している」と主張し、今度は地図の着色ではなく、島名の読み方を根拠にしたわけだ。この地図も『先民的足跡——古地図話台湾滄桑史』からの借用で、もともとアメリカ人 Joseph Hutchins Colton（1800～1893）によって製作されたものである^③。台湾の北の海上に Taiyu su と Hawaping san の表記が見え、それぞれ黄尾嶼と釣魚嶼に比定されているが、後者の発音は「花瓶山」の中国語読みに近いので、台湾の近海に浮かぶ「花瓶山」（別名「花瓶嶼」）と混同されたのではないかと思われる。尖閣諸島を巡る名称混淆の問題について、後ほど改めて触れることにする。

この地図の着色に対して、中国側が不問に付した背景には幾つかの理由が考えられる。第一に、台湾・琉球・尖閣諸島は同じ黄色に塗られているのに対し、中国は緑色（福建）・赤色（広東）・黄色（江西）など省ごとに色分けされているため、着色から尖閣諸島の中国

帰属を主張するのは不都合だ。第二に、八重山に Pa chong san、宮古島に Typing san というように、「八重山」「太平山」の中国語読みが記されており、中国風の発音だからと言って、中国領とは限らないことがよく分かる。第三に、TIBET、MONGOLIA 及び新疆の大半は朝鮮やベトナムと同じく無色で、清朝版図の圏外に位置している。もしこの地図を根拠にして、尖閣諸島の領有権を主張できるなら、同じロジックでチベット・内モンゴル・新疆は「中国固有の領土」でないことを認めざるを得なくなる。中国側がこのジレンマを回避しようとするのも無理はない。ちなみに、「Colton's CHINA」の 1855 年版を見ると、尖閣諸島・台湾・琉球はいずれも無色だ⁽⁴⁾。

三つ目の地図「A NEW MAP OF CHINA」(イギリス・1801 年) も同じ問題が存在している。イギリス人画家 John Cary が 1801 年に初版、1811 年に再発行したこの地図では、福建・台湾・宮古島・尖閣諸島が同じ黄色に塗られているので、やはり地図の着色からは島の帰属関係が判然としない。台湾北東の海上に五つの島が描かれ、それぞれ Pon kia (彭佳嶼)、Hoan-pin-su (花瓶嶼)、Hao-yu-su (釣魚嶼)、Hoan-oey-su (黄尾嶼)、Tche-oey-su (赤尾嶼) と辛うじて読み取れるが⁽⁵⁾、「閩南語の発音だから中国領だ」と言われると、閩南語が分からない筆者にはその当否・真偽を知る由もない。ただ、確実に言えるのは宮古島に Taypin (太平)、八重山に Pachon (八重) といった中国語読みが付いていることだ。当時、東シナ海に進出するヨーロッパ船の乗組員の中に広東・福建の出身者もかなりいたので、尖閣諸島・宮古島・八重山に中国名を付けられたとしても不思議なことではない。要するに、島名の発音表記だけを以って、島の帰属を判定しようとするのは短絡的で、説得力に欠ける。それより、同一地図の上、福建・台湾から宮古島・八重山までの地名がすべて北方官話の発音となっているのに、なぜ尖閣諸島だけが「閩南語の発音」と断言できるのか、といった疑念が残っている。

国務院白書が言及した四つ目の地図は、英国海軍海図官局が 1877 年 3 月 24 日に刊行した CHINA-EAST COAST HONG-KONG TO GULF OF LIAU-TUNG (中国東海沿岸自香港至遼東湾海図) である。これは、劉江永書が扱った「Coast of China between Formosa Island & Pi-Chi-Li Gulf: Eastern passages to China and Japan」(イギリス・1867 年)、1845 年 6 月に尖閣諸島測量を実施した英国軍艦サマラン号 (SAMARANG) の海図などと同様、いずれも英国海軍が作ったアジア海図の違うバージョンだ。図面には Hoapin su、Ti-a-usu、Raleigh R^k、Pinnacle Is. が見えるが、「中国領」注記や境界線など存在しない⁽⁶⁾。19 世紀に入って、イギリス海軍による東シナ海の測量調査が活発化し、関連地図・海図も多数発行された。台湾歴史博物館所蔵西洋製アジア古地図コレクションの図録を見ると、「英国海軍部製」を冠したものは 8 点に及ぶ。デジタル画像を確認したところ、Hoapin-su、Tiau-su、Raleigh Rock を記していないものもかなりあることが分かった⁽⁷⁾。表記あるものだけ取り上げるが、表記のない方が多いという事実を覆い隠すとは中国側の常套手段で、一事が万事、他の古地図の扱い方は推して知るべしだ。

最後に、『先民的足跡——古地図話台湾滄桑史』という種本についても一言述べておこう。これは、許雪姬・呉密察ら台湾を代表する一流学者の労作で、早期台湾の古地図を収録した史料集として利用価値が高い。ただ、「愛国心」の衝動か、尖閣の話になると、ついつい勇み足を出してしまう。「玉に瑕」と言うべきか。「Colton's CHINA」の解題を見ると、「This American map by Joseph Hutchins Colton(1800~1893) from 1859, entitled *Colton's*

China, clearly depicts the islands Tiaoyutai, Huangwei and Chengoe.」と書いているが^⑧、地図に描かれたのは Tiayu su と Hawaping san 二島のみで、Chengoe は存在しない。意図的に島名を捏造、追加したのである。また、1879年にスペインで出版された地図「ASIA」について、「A Spanish map from 1879, authored by J.P. Morales and published by Montaner & Simon in Barcelona, indicating the sea boundaries of Japanese empire and Chinese empire (Tunghai), clearly showing that the islands Tiaoyutai, Huangwei, and Chengoe fall under Chinese authority.」とコメントしているが、Tiaoyutai、Huangwei、Chengoe 三島とも図上のどこにも見当たらず、完全なでっち上げだ^⑨。

ともあれ、数多の西洋製古地図の中で、中国論客が苦勞して探し当てた、尖閣諸島を描き込んだ地図は僅か十数点に過ぎず、島の位置・形状が不正確で、誤記・混淆が目立つなどの問題はさておき、そもそも、「Colonia de Chines」(中国領)とか「Insula de Formosa」(台湾属島)など、中国側の主張を裏付けるような注記は皆無だ。当たり前のことだが、「古地図に描かれた」ことと「中国版図に属す」ことはイコールではない。況して「当時、各国で釣魚島はすでに中国領として見做されていた」云々、荒唐無稽の言に他ならない。では、西洋製地図において尖閣諸島がいつ、どのように姿を現したのだろうか。

二、西洋製地図における尖閣諸島の登場

尖閣諸島が西洋製地図に現れたのは、ヨーロッパ人による「オリエント探検」の副産物と言ってよい。周知のように、マルコ・ポーロ (Malco Polo, 1254~1324) 『東方見聞録』の流布により、「黄金の国ジパング」の存在が14世紀初頭のヨーロッパ社会に伝えられ、早くも15世紀の世界地図にその幻影が現れた。一般に、1459年にベネチアの修士フラ・マウロ (Fra Mauro) が描いた世界図 (ドッヂェス宮殿の壁画) に登場した *Ixola de Cimpagu* (シンパグの島) が嚆矢とされている⁽¹⁰⁾。暫くして、リスボン在住のドイツ人貿易商マルティン・ベハイム (Martin Behaim) が1492年に作った地球儀では、*Cipango* (ジパング) が南北に縦長の島として東アジアの海上に描かれた⁽¹¹⁾。いずれも『東方見聞録』の記述に基づいた想像図 (測量に拠らぬ、空想的図形) で、後者では、日本の南に *Indieser Insul*、*Crisis*、*chilis* といった架空の島々が配置されるほどだった。

時恰も大航海時代の夜明けに当たる。コロンブスの新大陸発見 (1492~1502) やマゼランの世界周航 (1519~1522) を先駆に、やがてポルトガル・スペイン・オランダ・フランス・イギリス……「南蛮人渡来」「紅毛人来航」がスタートする。ポルトガル船隊が1511年にマラッカを占領し、翌年香料諸島モルッカに進出した。更に1514年頃から中国海岸に出没するようになり、遂に1543年8月25日、中国船に乗った三人のポルトガル商人が種子島に漂着し、鉄砲を伝えたのが西洋人初の「日本発見」となる。一連の来航は、アジア航路の開通とともに、ユーラシア大陸東端の地理探検を意味する出来事でもあった。その後、フランシスコ・ザビエルをはじめイエズス会宣教師たちの到来が相次ぎ、インド・中国・日本などの関連情報が続々とヨーロッパ各国に送られていった。西洋人の探検家たちが未知の土地や新航路を求めて海外へ進出するにつれて、ヨーロッパ人の地理知識は一躍全世界にまで拡大する。その結果、世界地図の需要が急増し、製作・出版事業も繁栄期を迎えた。16世紀半ば以降、マカオを拠点にしたヨーロッパ人航海士・貿易商・宣教師を載せた船が台湾海峡やフィリピンを経由して北上し、中国や日本を目指して来航するのだ

が、彼らは海図を手にして、航海中望見した島々—台湾・琉球・八重山・宮古島・尖閣諸島などを次々と地図・海図に付け加えていったことは想像に難くない⁽¹²⁾。

1506年にイタリア人 Giovanni Matteo Contarini が製作した世界図は、コロンブス航海による新しい海外情報を取り入れたと言われているが、東アジアの部分を見ると、中国の北部に *Provincia Cathay* (契丹地方)、南方に *Provincia Mangi* (蛮子地方) との書き込みがあり、海の上に *Zipangu* (日本)、*Iava Insvra* (ジャワ) が見えるが、琉球・台湾・フィリピンの姿は未だ見当たらない⁽¹³⁾。時代が下ると、ポルトガル人製図家ローポ・オーメン (*Lopo Homen*) が 1554 年に作った *World Map* では、*japam* (日本) は *Sina regio* (シナ) の東端に張り出している半島として描かれ、日本から *I.fremosa* (台湾) まで点々と連なる島の鎖に *I.dos reis magos* (八重山)、*I.dos lequios* (琉球) などの地名が見える。この地図に描かれた東アジアの海域は、実際に現地に渡航したポルトガル人船員の証言に依拠しており、弓状列島の東に *Os lequios* (琉球群島) と大書しているのが特徴だ⁽¹⁴⁾。日本・琉球に次いで、台湾が *Fremosa* (「麗しき島」の意、後に *Formosa* と綴る) の名称で西洋製地図に初登場したことは特筆に値する。

1570年、アントワープで地図出版業を営むオランダ人オルテリウス (*Abraham Ortelius 1527~1598*) が、世界初のアトラス『*THEATRVM ORBIS TERRARVM*』(『世界の舞台』) を出版した。収録した銅版彩色 70 図のうち、「*TYPVS ORBIS TERRARVM*」(世界全図)、「*ASIAE NOVA DESCRIPTIO*」(アジア図)、「*TARTARIAE SIVE MAGNI CHAMI REGNI*」(韃靼図)、「*INDIAE ORIENTALIS INSVLARVMQVE ADIACENTIVM TYPVS*」(東インド図)などがあり、*IAPAN*(日本)の南の海に散らばる島々に *Lequio maior* (大琉球)、*I.Fermosa* (台湾)、*Reis magos* (宮古島・八重山)、*Lequio minor* (小琉球) とそれぞれ名付けている⁽¹⁵⁾。弓状列島の形状・位置があやふやで、島名の綴りも図によって異なるが、琉球・宮古島・八重山・台湾の存在をヨーロッパ社会に知らせ、その後の欧州の地図製作にアジア地名表記の範を垂れたという意味で、画期的な出来事と言えよう。もっとも、「台湾」と「小琉球」を併記したのは、ポルトガル人探検家が提供した初期情報の中に誤認が多かったことを示唆している。後の増補版に「*CHINAE*」(中国図、1584年)⁽¹⁶⁾や「*MARIS PACIFICI*」(太平洋図、1589年)が加えられたが⁽¹⁷⁾、島の配置・地名は大同小異だ。アブラハム・オルテリウスは、投影図法の発明で知られるメルトカル (*Gerard Mercator*) と肩を並べ、16世紀ヨーロッパを代表する地図製作の先駆者と評される人物である。メルトカルの代表作「アジア図」(1595年)や「インド付近図」(1575年)を見ると、弓状列島の配列も名称もオルテリウス地図に類似していることが分かる⁽¹⁸⁾。

以後約二百年の間、ヨーロッパ各国でアジア関連の地図が次々と発行されたが、琉球を中心とする弓状列島の図形は、基本的にオルテリウス地図を踏襲していた。オランダ人ブラウ (*Joan Blaeu 1598~1673*) の「アジア図」「東インド」「中国」(1662年)も⁽¹⁹⁾、ホマン (*Johann Baps Homann*) の「世界図」(1720年代)も⁽²⁰⁾、オルテリウス地図の図形とさほど変わらず、*Corca.Inl* (朝鮮半島) の登場は印象的だ。1747年、フランス海軍製図技師ニコラ・ベラン (*Jacques Nicolas Bellin, 1703~1772*) が、旅行記編集のために、「*CARTE DES ISLES DU JAPON*」(日本諸島・朝鮮半島及び中国沿岸図)を製作した。*NIPON* と *I.Formosa* の間に *Gr.Liqueio* (大琉球) を中心とする列島の鎖が描かれ、*Is.dos Reys Magos* (宮古島) の西に緑色の島影が微かに見えるものの、島名を欠いている⁽²¹⁾。

また、1790 年前後の作品と思われる英国人ロットル (A.Lottey) の「アジア図」では、I.Formosa の北に尖閣諸島らしき数個の小島が点在しているが、やはり名前が欠落している⁽²²⁾。この地図は、1768～78 年に南極からベーリング海峡まで探検航海を敢行したイギリス人探検家クック (James Cook) の探検図に拠ったもので、図上にクックの辿った航路を示した線が入れているが、台湾・琉球・日本から程遠い。ともあれ、16～18 世紀西洋製アジア地図を一通り渉猟してきたところ、尖閣諸島の姿はつい発見できなかった。

ところで、1798 年にパリで出版された『Voyage de La Perouse Autour du Monde』というラ・ペルーズの世界周航記には、附図 No.39 「Carte Generale des Decouvertes dans les Mers de Chine et de Tartarie」(中国・韃靼海域探検全図) があり、マニラからカムチャツカ半島までの航路を示す一本線が、台湾北東の海上に I.Hoapinsu (釣魚嶼) と Tiaou-su (黄尾嶼) の脇を横切るように引かれ、この二島の東に Tchi-beysou (赤尾嶼) も見える⁽²³⁾。著者ラ・ペルーズ (La Perouse、1741～1788) は、フランス人探検家としてルイ 16 世の命を受け、1785～88 年にユーラシア大陸北東沿岸部の探検航海を敢行した。帰航の際、カムチャツカ半島から朝鮮半島沿岸を通過して南下した船は、台湾へ至る途中で与那国島に寄って測量を行ったことも伝えられている。この地図では、与那国島に kumi、台湾に L.FORMOSE、基隆に Kilon とそれぞれ名付けた。こうして、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、尖閣諸島が漸く西洋製地図に姿を現したが、探検航海の標識島として記されたのはその由来だったと言えよう。

その後、1805 年にワイマールで出版された「Charte von Asien」(アジア図) は、作者のドイツ地理学者ライヒャルト (C.G.Reichard、1758～1837) がラ・ペルーズの探検結果をいち早く取り入れたと思われるが、台湾の北に Hoapinsu と Tiaoyusu の二島があり、日本は黄色、中国・朝鮮・琉球・台湾・尖閣諸島はすべて薄緑色に塗られている⁽²⁴⁾。ラ・ペルーズ地図から影響を受けたドイツ製地図が他にも数種ある。ワイマール地理学研究所刊行の「東洋図」(1806 年) を見ると、FORMOSA (台湾) と Lieu Kien (琉球) の間に Tiaoyusu (釣魚嶼) が見える⁽²⁵⁾。1833 年にベルリンで発行された Julius Ludwig Grimm 「Karte von Hoch-Asien (Blatt China)」(アジア航海図) で、MADSCHIKO-SIMAH (宮古島) の西北の海上に Tiaoyo-su・Hoapin-su・Felsu の三島が描かれている⁽²⁶⁾。

19 世紀に入ってから、イギリスやフランスにおいても、尖閣諸島を記した地図が現れた。1815 年、Edinburgh の地図出版業者 John Thomson が『A New General Atlas of the World』(世界新地図集) を発行したが、その中の「CHINA」を見ると、台湾の北に Tiaoyu su と Hoapinsu が描かれている⁽²⁷⁾。1862 年、フランス人 E.Andriveau Goujon が製作した「Asie Orientale Comprenant L'Empire Chinois et le Japon, les Etats de l'Indo-Chine et le Grand Archipel d'Asie」(東亜、中華帝国、日本、インドシナ及びアジア諸群島図) で、やはり台湾の北に Tiaosu と I.Hoapinsu が記されている⁽²⁸⁾。どちらも台湾・チベットと中国本土を色分けしており、尖閣諸島の帰属を示唆する手掛かりなど発見できない。

さて、ここで本学図書館所蔵の世界古地図コレクションを紹介したい。まず、1786 年にパリで出版された「CARTE DE L'EMPIRE DE LA CHINE ET DU ROYAUME DE CUREE. AVEC LES ISLES DU JAPON」(中華帝国、朝鮮及び日本列島図)⁽²⁹⁾。これは、フランス人製図家リゴベール・ボンヌ (Par. M. Bonne、1727～1789) が作った銅版彩色地図 (24×35cm) で、国土の縁取りとして、日本は緑藍、朝鮮は赤、中国・台湾・琉球

は浅黄に彩られている。I.FORMOSE と Lekeyo の間に描かれた三つの島影のうち、Cumi (久米島) に近在する Tche-oey-su は赤尾嶼ではないかと思われる。尖閣諸島を描いた18世紀末期の古地図として稀有な一品だ。周辺の島の名称として、基隆に Kilon、宮古島に Tay-pin、八重山に Pa-tchon、与那国島に Yeu-na-cu-mi など、中国語読みと日本語読みが入り混じっており、Tche-oey-su の帰属について何も触れていない。

ボンヌのこの地図は、清康熙帝に仕えたフランス人のイエズス会士ゴービルの影響を受けたと思われる⁽³⁰⁾。ゴービル (Antoine Gaubil、中国名：宋君榮、1689～1759) は1758年、清朝冊封副使として琉球に派遣された徐葆光の『中山伝信録』(1719年) をフランス語に訳し、『Memoire sur les isles que chinois appellant isles de Lieou-kieou』(琉球諸島に関する覚書) という題名で出版した⁽³¹⁾。これは、琉球に関する情報を初めてヨーロッパに伝えた書物として、後に北東アジア・北太平洋探検航海を志すヨーロッパ人探検家の間でガイド・ブックとして親しまれていた。書中、「CARTE DES ISLES DE LIEOU-KIEOU」(琉球諸島図) があり、そこには基隆から那覇への航路を示す添え書きの線 (Route de Kilougechau du Port de Napa-kiang) が引かれ、航路に沿って Kilouchau、Tiaoyusu、Haipinsu、Haonghoeyusu、Tcheoeyusu などの標識島がぎっしりと描かれている⁽³²⁾。この「琉球諸島図」は、『中山伝信録』にある「針路図」「琉球三十六島図」を下敷きにした故に、島名の大半が中国読みとなっている。当然ながら、ゴービルもボンヌも尖閣諸島を「中国領」と思って、そう表記したわけではない。

次の一品は、「CARTE DE L'EMPIRE DE LA CHINE, DE LA TARTARIE CHINOISE, ET DU ROYAUME DE COREE avec les ISLES du Japon」(中華帝国及び韃靼・朝鮮・日本列島図) といい、1780年にパリで出版された銅版彩色地図 (22×33cm) である⁽³³⁾。製作者 Rigobert Bonne は上のボンヌと同時代に活躍していた地図製造業者だ。図形・着色を見ると、本州は台湾と同じ緑色、九州は琉球と同じ黄色、中国は省ごとに黄色・赤色・緑色・青色に塗り分けられている。I.FORMOSE と Lequeo の間に宮古島・八重山と思われる島の群れが描かれているが、名称が悉く欠落している。尖閣諸島の位置にも島の影が微かに見えるが、表記がなく定かでない。ちなみに、この地図においても、TIBET は清朝版図の圏外に置かれている。Rigobert Bonne は多産の地図製作者で、台湾歴史博物館所蔵西洋製アジア古地図コレクションの図録を調べたところ、作品は6点に及ぶ。

三点目は、「Karte von den Eylanden von Japon und der Halbinsel Corea, Nebst den Chinesischen Kusten von Peking bis Canton」(日本列島、朝鮮半島、北京から広東までの中国海岸図) と題するマップ (24×36cm、銅版彩色)⁽³⁴⁾。これは、前述したニコラ・ベラン地図のドイツ語版 (1747年) で、図面を見ると Nipon と I.Formosa の間に Gr.Liqueio (大琉球)、I.sdes Reys Magos (宮古島) などの島がくっきりと見えるが、尖閣諸島は見当たらない。ベランはリゴベール・ボンヌの職場先輩に当たり、彼の署名入りの地図・海図は200点以上数えられ、英語やイタリア語、オランダ語にも翻訳、出版された。

四点目は、1831年にロンドンで発行された「China and Japan」という地図 (36.5×46cm、銅版彩色) で、製作者は英国の地図出版商 Henry Teesdale という。宮古島の北西に尖閣諸島の Tiaoyusu、Hoapinsu、Rock が描かれ、台湾の北に Hoausu と Quelon.I の二島が表記されている。地図の色分けとして、日本・琉球に浅緑色、台湾・福建の輪郭に黄色、中国は各省ごとに異なる着色を施されている⁽³⁵⁾。尖閣諸島の表記があっても、その帰属は判

然としない。そもそも、製作者本人もそのことを意識していなかっただろう。

最後に、1901年にニューヨークで発行された地図「A NEW MAP OF THE CHINESE EMPIRE WITH JAPAN AND KOREA」（製作者：RAND, McNALLY & CO.）について見てみよう。この地図では、EASTERN SEAにRYUKYU ISLANDSの文字が大書されており、文字列の南側にOKINAWA、YAYEYAMAなどの表記・図形が見られ、その北側にTIA-YU-SU、PINNACLE IS、ROCKの表記及び五つの島図形が近在している⁽³⁶⁾。これらの島を含め、福建・日本・沖縄・台湾はすべてピンク色に塗られているが、帰属不明だ。19世紀以降、世界地図の上で尖閣諸島の位置が次第に明らかな姿を現すようになった。

このように、近世・近代ヨーロッパ製の世界地図において、日本は15世紀後半、琉球・台湾は16世紀半ば、宮古島・八重山は16世紀後半に登場してきて、尖閣諸島も遅ればせながら18世紀末から19世紀初頭にかけて漸く姿を現すようになったわけである。このような時間差は、ヨーロッパ人による「アジア発見」の順序を反映したものであるが、尖閣諸島の領有権を示唆するような証拠材料と言え、どこにも見当たらない。

三、西洋製海図と尖閣諸島

世界古地図の上で尖閣諸島の幻影を追跡するには海図の存在も無視できない。海図とは、上で見てきた各種のマップと異なり、いわば航海専用の案内図で、図形には幾つかの特徴が見られる。ある地点（例えば琉球、マニラ）を中心に放射線状に色付きの何本もの方位線が伸びていき、航海の針路を示している。暗礁や浅瀬の記号だけでなく、上下・左右の飾り枠に経緯度を示す目盛りがあり、図面の余白に西洋風の羅針盤や縮尺も描き込まれている。中には欧州王室の旗・紋章、或いは異邦人や海獣の絵図を添えるなどデザイン性に優れたものもあり、古美術品として珍重される。素材として耐水性を持つ革製（羊皮紙）のものが多く、実用品であることは一目瞭然だ。

1502年、イタリア人Alberto Cantinoがポルトガルから密かに持ち帰った「Planisphere」（世界図）は、現存する最古の海図の部類に入る。そこには中国大陸の海岸線が長く引かれているが、以東の海上は空白で、日本も琉球もまだ登場していない⁽³⁷⁾。同じイタリア人Diogo Ribeiroが1529年に作った「Carta Uniuersal」（世界航海図）を見ると、MARE SINARV（中国海）の上にLequios（琉球人）が書き込まれ、琉球は台湾より一歩先にヨーロッパの海図に姿を現したのである⁽³⁸⁾。時代が下り、Diogo Homemのアジア図（1558年）⁽³⁹⁾、Baertholomeu Velhoの世界図（1561年）⁽⁴⁰⁾、そしてLazaro Luizの東亜図（1563年）⁽⁴¹⁾が相次いで発行されたが、いずれもJapanからI.Formosaまで点々と連なる列島が描かれ、Lequio maior、I.dos reis magosなどの島名が読み得る。中でも、Diogo Homemのアジア図では、半島化された日本の東方洋上にMare leucorum（琉球海）、日本の北の大陸部にはLeucoru prouintia（琉球地方）と大書されており、どうやら製作者が日本・朝鮮・沖縄・台湾を含む東方洋上の列島全体を引っ括めて、「琉球」と見做していたようだ。

17世紀に入って、新興国オランダが海洋進出・権益争奪に乗り出し、やがてポルトガル・スペインに取って代ってアジアの海を制覇していく。1602年にDutch East India Company（東インド会社）が創設されると、地図製作業が益々繁盛し、忽ちイタリア・ポルトガルを凌駕するようになった。1621年、オランダ東インド会社の製図技師ヘッセル・ゲーリッツ（Hessel Gerritsz）によって、海図「South-East and East Asia」が発行され

(42)、1660 年には Pieter Goos 製作の「Oost Idien」も出版された(43)。両者とも中国・日本の海岸線に地名が細かく入っており、九州の南から弧状に延びる Lequio grande (大琉球)・Lequio pequino (小琉球)・I.dos reis magos (宮古島)・I.formosa (台湾) などが描かれている半面、尖閣諸島は見当たらない。その他、ヘッセルの「MAR PACIFICO」(太平洋図、1622 年)(44)、同僚 Williem Janszoon Blaeu (1571~1638) の「Indian Quae Orientalis Dicitur, et Insulae Adiacentes」(東インド及び近隣諸島図、1635 年)においても(45)、島名表記は大同小異だ。後者は、『Theatrum Orbis Terrarum, sive Atlas Novus』(世界舞台の新地図集) 所載 209 図の中の一葉で、当時では権威的存在だったらしい。

ところで、『釣魚台列嶼——歴史與法理研究』において、著者は四点の朱印船航海図を取り上げ、「在台湾の右上角清楚標出釣魚台列嶼」と主張するが、些か唐突感が否めない(46)。実際に、「糸屋随右衛門東亜航海図」(江戸初期)、「末吉孫左衛門東亜航海図」(江戸初期)(47)、「小加呂多」航海図(江戸中期)、「航海古図」(江戸初期)の図面を確認したところ(48)、タカサコ(台湾)の北東、今の八重山諸島の周辺に数個の島影が見えるものの、「小加呂多」を除いて、島名が悉く欠落している。「小加呂多」に書き込まれた「レイス」とは、上述した西洋の地図にある Reis の音訳で、西洋人の宮古島か八重山に対する呼称 Dos Reis Magos (聖書に由来する「東方三博士」の意)に由来する名称だが、尖閣諸島なのか八重山諸島なのか判然としない。もしかして両者を取り違えられたのかもしれない。もう一枚「東洋南洋航海古図」(江戸中期)を見ると、「レイス」の横に「トリシマ」と記しているが、仮に「鳥島」(硫黄島)だとすれば、尖閣諸島の位置に近すぎる嫌いがある(49)。

これらの古航海図は、図形が基本的に類似しており、いずれも朱印船時代(1604~1635)において、日本の貿易商や船乗りたちが東南アジア渡航に際して使用した海図で、一般に「御朱印船航海図」と総称される。室町時代末期以降、渡来したポルトガル人から伝えられた Carta を基に、日本人自らの航海体験を取り入れてアレンジしたものと思われる。地名表記を見ると、欧文とともに漢字・平仮名・片仮名も併記され、日本人の創意工夫を込めたマップとして、自ずと原図と一線を画している(50)。当時、朱印船が尖閣諸島の周辺を通過していたことは十分考えられ(51)、古航海図に描かれた小島が本当に尖閣諸島だとすれば、「17 世紀初頭、日本人による尖閣発見」という推論の裏付けとなり、中国側にとって不利なはずだ。なぜ鄭海麟がわざわざこれを持ち出したのか、不思議でならない。

他にも西洋製の原図として、東京国立博物館所蔵「南洋鍼路図」(CORNELIS DOETSZ、1598 年)「西洋鍼路図」(オランダ製、1598 年)、京都大学地理学教室所蔵「東亜航海図」(オランダ製、17 世紀初)など数点が現存している(52)。いずれも台湾の北に島の影が描かれたものの、島名を省いている。このように、近世ヨーロッパ製海図において、スペリングの違いこそあるが(ポルトガル語・スペイン語・オランダ語などの差異)、「Lequeo Grande」「dos reis magos」「Lequeo Pequeno」「Formosa」四つの表記がほぼ定型化されていた。尖閣諸島と言えば、ちっぽけな無人島なので、宮古島か花瓶嶼と取り違えられることが多く、海図に描き込まれるようになったのは 19 世紀に入ってからのことだ。

さて、18 世紀に入って、フランス人が海洋の覇権を握るにつれて、ヨーロッパの地図製作中心地も次第にベネチア・アムステルダムからパリへと移っていった。フランス海軍製図技師ベランが 1765 年に海図 Hydrographie Francoise を出版し、絶大な人気を博した。その中に「L'Isle Formose et Partie des Costes de la Chine」(台湾諸島及び中国海岸図)

が見られるが、台湾の北端が I.Kelang.et (基籠) となり、その先の海上は空白のまま⁽⁵³⁾。ベランはイギリス王立協会の会員を務め、王室御用達の海図製作も担当していた専門家なので、この海図は、1684年に清朝に併合された後の台湾の領域範囲に対するヨーロッパ人の認識を如実に物語っているように思える。

筆者がリサーチした結果、尖閣諸島を記した海図 2 点の存在を突き止めた。一つは、1796～97年に北太平洋海域の探検調査を実施したイギリス軍艦プロビデンス号のウィリアム・ブロートン艦長 (William Robert Broughton, 1763～1821) が著した『A Voyage of Discovery to the North Pacific Ocean, London, 1804.』(北太平洋探検航海記) の附図で、ISLANDS OF MADJICOSEMAR (宮古島) の西北に Pinnacle Islands (尖閣諸島) が描かれている⁽⁵⁴⁾。更に 1819年、ブロートン艦長がスケッチした『PANORAMIC SKETCH of NAPACHAN on the Island of LIKEO or LOOCHOO』(大琉球パノラマ) も出版され、中には「魚釣島」と「南小島・北小島」の二枚 (1797年7月7日観測) が見られる⁽⁵⁵⁾。ブロートンはゴービル『琉球諸島に関する覚書』の部分を英訳したほどの愛読者で、彼の航海記とスケッチブックは、西欧人の沖縄来航の最初の文献として注目されている。もう一枚は、1853年にフランス海軍部によって出版された「Carte de la mer de Chine Detroit de Formose」(中国沿海及び台湾海峡図) である。海軍測量士 J.de la Roche-Poncie が製作したこの海図は、1845～47年、英国海軍の艦長 R.Collinson、D.M.Gordon が作成した台湾測量図に基づいているが、台湾の北に Agincourt.I、Crag.I、Pinnacle.I の三島があり、更にその北に Hoapin-su、Tao-su、Raleigh が描かれている⁽⁵⁶⁾。ところが、R.Collinson の原図「CHART FORMOSA ISLAND」と照合すると、Agincourt.I、Crag.I、Pinnacle.I 三島止まりとなっている⁽⁵⁷⁾。いずれにせよ、海図はあくまで航海の案内図で、島嶼表記の有無と島の領有権は無関係だ。

四、英国海軍製海図と名称混淆の問題

19世紀に入ってから、西洋製アジア地図の中に尖閣諸島を記したものが漸く現れたが、その多くは、釣魚嶼を「Hoapin-san」か「Hoapin-su」、黄尾嶼を「Tiau-su」と表記し、また、釣魚嶼周辺の岩礁群を引っ括めて、「Pinnacle Groups」か「Pinnacle Islands」(ピンナクル嶼) と名付けたものである。これらの欧文地名を世に広げ、定着させたのは、英国軍艦サマラン号 (SAMARANG) が 1845年6月に実施した尖閣諸島の測量だった。

これは世界で最初に行われた尖閣諸島の実測だったが、サマラン号の目的は先島諸島の測量であって、尖閣諸島の測量は序での片手間仕事に過ぎない。艦長サー・エドワード・バルチャー (Sir Edward Balcher) の航海日誌 (*Narrative of the Voyage of H.M.S. Samarang during the years 1843-46*, by Captain Sir Edward Balcher: LONDON, 1848.) によると、サマラン号は 1845年5月初め、香港からフィリピンに東行し、そこから北上して台湾の東岸を経て、MEIA-CO-SHIMA ISLANDS (宮古島) に到達した。6月14日に与那国島の測量を終えた同艦は、一旦石垣島に立ち戻り、夕方「海図上の Hoapin-San を目指して航路を定めた」という。翌日 Hoapin-San と Pinnacle Groups を測量し、16日に Tiau-su の測量を行った後、19日に那覇港に寄港した⁽⁵⁸⁾。一連の測量の結果は、1855年に海図 (*The Islands between Formosa and Japan with the Adjacent coast of China, 1855.*) として出版された⁽⁵⁹⁾。この海図及びサマラン号航海日誌の記載が、英国海軍水路

局編集『中国海針路誌』(1884年)をはじめ、19世紀後半に出版、再版された各種の中国水路誌や海図に用いられた「Hoapin-su」「Tiau-su」「Raleigh Rock」「Pinnacle Groups」といった表記の元となったが、名称混淆の問題もまたそこから生じたのである。

結論から言えば、「Hoapin-su」「Hoapin-san」は本来、台湾の附属島嶼「花瓶嶼」「花瓶山」の中国語発音だが、サマラン号当事者の誤認で釣魚嶼の名称表記に用いられた。後に日本人黒岩恒、中国人王徳均の翻訳によって、「Hoapin-san」の発音から訛って、「和平山」か「和平島」の当て字を付けられ、釣魚嶼の呼び名を複雑にしたわけである。一方、「Tiau-su」は「釣嶼」の中国語発音で、海道針経や使琉球録の中で釣魚嶼を指す地名として使われていたが、これもまたサマラン号当事者によって黄尾嶼の呼び名に誤用された。こうした誤認・誤用が重なった結果、後の日中両国の地図製作・出版において、尖閣諸島の欧文地名も漢字地名も錯雑し、徒に混乱を来したのである。

前述したように、国务院白書が孫引きした英国海軍海図官局発行の「CHINA-EAST COAST HONG-KONG TO GULF OF LIAU-TUNG」(中国東海沿岸自香港至遼東湾海図)も、サマラン号の航海日誌と海図の影響を受け、Hoapin-su、Ti-a-usu、Raleigh R^k、Pinnacle.I^sを記した一方、SAKISHIMA GUNTOやNANSEI SHOTOの表記もくっきりと見える⁽⁶⁰⁾。もう一つ厄介な問題がある。1866年6月、英国軍艦サアペント号が中国沿岸及び台湾周辺の測量を実施した際、艦長 Lieutenant Bullock が台湾の北にある彭佳嶼に Agincourt.I、棉花嶼に Crag.I、花瓶嶼に Pinnacle.I と名付け、翌年刊行の海図に載せた⁽⁶¹⁾。すると、花瓶嶼を指し示す Pinnacle.I と尖閣諸島を指し示す Pinnacle がまた混淆してしまい、紛らわしい。現に台湾省文献委員会が1970年に編纂、出版した『台湾省通誌』(巻一土地志疆域篇)を見ると、Bullock 艦長の考案した英語名に基づき、「花瓶嶼」の注釈に「英名称為 Pinnacle Id.意即尖閣嶼」と記している⁽⁶²⁾。こうして、「Hoapin-su」「Pinnacle」といった欧文地名だけでなく、漢字地名「尖閣」を巡っても混乱が生じたわけである。

明治期の日本海軍水路誌を繙くと、尖閣諸島に関する記載は殆ど英国海軍水路誌を底本としていることが分かる。明治19年(1886)3月刊行の海軍省水路局編纂発行『寰瀛水路誌』巻一下には尖閣諸島に関する記述があり、「編纂縁起」によれば、「本巻の編纂は重に明治三年以来我が水路局実測海軍将校の実験筆記、沿海府県海岸取調書及び一千八百八十四年英国水路局官刊支那海針路誌第四卷第二版等に基づく」という。尖閣諸島について、「爾勒里岩」(ラレー)、「尖閣群島」(ピンナツクルグロース)、「低牙吾蘇島」(チャウス)の三つを取り上げ、それぞれ英語名 Raleigh Rock・Hoapin-San・Tiau-Su のルビと短文解説を付けている。『寰瀛水路誌』の改訂版として、明治27年(1894)7月に刊行された『日本水路誌』第二巻を見ると、カタカナで「ラレー岩」「ホアピンス島」「ピンナクル諸嶼」「チアウス島」の四つを記している。また明治41年(1908)10月刊行の第一改版『日本水路誌』第二巻では、「赤尾嶼」(Raleigh rock)、「魚釣島」(Hao pin su)、「尖頭諸嶼」(Pinnacle Is.)、「黄尾嶼」(Tiausü)を取り上げている。ここの「尖頭諸嶼」とは、前の「ピンナクル諸嶼」と同じ意味で、魚釣島に近隣する北小島や南小島を指している。さらに、大正8年(1919)7月刊行の『日本水路誌』第六巻では、「赤尾嶼」「尖頭諸嶼」「黄尾嶼」「魚釣島」「飛瀬」「南小島及北小島」と詳記しており、英文名が悉く消えた⁽⁶³⁾。その後、もともと南小島や北小島を指し示す地名「尖頭諸嶼」は、次第に「尖閣列島」「尖閣群島」へと変更し、尖閣諸島全体を意味する名称に変わっていった⁽⁶⁴⁾。

翻って中国の方に目を転じると、江南製造局に務める王徳均は 1870 年、英国海軍水路局刊行『中国海図誌』（1861 年版）を翻訳し、『海道図説』との題名で出版した。その中で、南小島・北小島に「凸列島」、釣魚嶼に「和平山」、黄尾嶼に「低牙吾蘇島」、赤尾嶼に「尔勒里石」などの訳名を与え、簡潔な解説も付けた⁽⁶⁵⁾。また、前文に「凸島」（花瓶嶼）、「克来克島」（棉花嶼）、「挨金可尔特島」（彭佳嶼）といった音訳も見られる。更に福建—琉球航路について、「凡自粵省或香港……擬赴琉球者、必經台湾与福建間之水道。……過此即向和平山、底牙吾蘇島暨尔勒島以北、然後向東前行。俟能見可米山……」と記述している⁽⁶⁶⁾。王徳均の訳文に用いられた島名の当て字は、『寰瀛水路誌』のそれと酷似しており、恐らく日本海軍水路誌の編纂者が王徳均の訳語を参照したのであろう。

一方、陳寿彭は 1901 年、英国海軍水路局刊行『CHINA SEA DIRECTORY』（1894 年第 3 版）を翻訳し、『新訳中国江海險要図誌』として上海経世文社から刊行した。巻十一「台湾東北諸島」条には、「由台湾極北、直向東偏北一百七十迷當、列石列島、一道起伏如鍊然。……如花瓶嶼 Ho-pin-su 是也。此又有衆尖島與台夷嶼 Tia-usu、……其母勒利符石 Raleigh Rork 則為此鍊之最東焉」とあり、釣魚嶼に「花瓶嶼」、南小島・北小島に「衆尖島」、黄尾嶼に「台夷嶼」、赤尾嶼に「母勒利符石」の訳名をそれぞれ与えた⁽⁶⁷⁾。続きに「尖島」（花瓶嶼）、「庫利島」（棉花嶼）、「垂経可兒特島」（彭佳嶼）などの当て字も見られる。巻二図第四十二図「福建濱海及台湾等處」では、太平山（宮古島）・巴衝山（八重山）・姑米山（与那国島）の北に尖閣諸島らしき島影が微かに見えるが、名前を省いている。花瓶嶼・棉花嶼・彭佳嶼三島とも描かれず、太平山・巴衝山・姑米山などを一括りして、「迷職庫斯瑪群島」（宮古島群島）と表記している⁽⁶⁸⁾。ちなみに、「台湾東北諸島」条の末尾に「迷職庫斯瑪群島」（Meiaco shima group）の説明文一行が見られる。

最後に、19 世紀欧米で発行された台湾地図についても一瞥してみよう。中国側が長年、「釣魚嶼は台湾の付属島嶼として描かれている」との言説を散布してきたが、実際には、当時の台湾地図はすべて花瓶嶼・棉花嶼・彭佳嶼を北端とし、尖閣諸島の「尖」字も見当たらない。1854 年 2 月に二度目の日本来航を実行した Matthew.C.Perry 艦隊だが、帰航途中の 7 月 11 日、一隻の艦船 Mecedonian 号が石炭補給地を調べるために基隆に寄港し、アメリカ人の台湾初上陸を果たした。1856 年に出版された『ペリー艦隊日本遠征記』に添付する「The Island of Formosa」（James Ackerman 製作）は、アメリカ人によって作られた初の台湾地図と言われているが、台湾の北端が Agincourt.I、Crag.I、Pinnacle.I となっている⁽⁶⁹⁾。また、台湾駐在イギリス副領事を務める Robert Swinhoe が 1864 年に Journal of the Royal Geographical Society（皇家地理学会期刊）に掲載した論文に「Sketch Map of the Island of Formosa」があり、Crag.I と Pinnacle.I しか描かれていない⁽⁷⁰⁾。著者 Robert Swinhoe（1836～1877）は、Royal Zoological Society と Royal Geographical Society の会員を兼ねるほどの学者肌の外交官で、何回も台湾地理・生態調査を行ったし、1858 年に英国軍艦 Inflexible 号の通訳官として、一か月をかけて台湾全島の測量調査に参加したこともあるので、彼の地図は台湾の領域範囲を正確に捉えているはずだ。

このように、英国海軍が尖閣諸島に対して実地測量を実施した結果、尖閣諸島の経緯度・標高・地形・気候・生態などの地理学的数値が漸く明らかにされた。英米諸国に近代文明を仰ぐ立場に甘んじた清末の中国も明治初期の日本も、台湾や尖閣諸島に関する地理学的知識・情報の殆どは英国海軍部の製作した水路誌・海図から入手したのが実情である。そ

れだけでなく、日清戦争時、下関条約交渉を行う際、台湾・澎湖列島の割譲範囲を巡って、英国海軍部製作の水路誌・海図に依拠したという。元を辿れば、サマラン号の尖閣測量は先島諸島実測を行う際の序での出来事であって、台湾測量のためではない。この事実は、尖閣諸島の位置づけに対する当時の英国人の認識を示唆しているように思える。

おわりに

以上、16～19 世紀西洋製地図における尖閣諸島の描き方について考察してきた。総じて言えば、18 世紀末までは尖閣諸島を記した地図は皆無に等しい。19 世紀以降、探検航海の標識島として尖閣諸島の表記が海図に少しずつ現れてきたが、中国領有を示す手掛かりはなく、地図の色分けや島名の発音だけでは領有権主張の根拠とはなり得ない。そもそも西洋製台湾地図には釣魚島など存在しない。近年、尖閣諸島を記した古地図が新たに数点確認されたが、中国側にとっての「不都合な真実」が含まれている。

産経新聞記事(2020 年 12 月 16 日)によると、イギリスのスタンフォード地図店が 1887 年に発行した「ロンドン・アトラス」と、ドイツ人アドルフ・シュティエラー(1775～1836)が創業した地図出版社の 1875 年版 *Adolf Stieler's Hand-Atlas* が発見された。いずれも尖閣諸島と台湾の間に境界線が引かれ、1895 年 1 月 14 日に明治政府が領土編入する以前から欧州では尖閣諸島が日本領であると認識していたことを示している。ネット画像を見ると、前者では Hoapinsu、Tiayusu、Rock の三つが描かれ、台湾との間に境界を示す点線が引かれ、明らかに NAMBU SOTO、MIYAKO SIMA と一括して表記されている。後者においては、境界線で HoaPin su や Tia su が RIU-KIU ODER LU-TSCH(Japanisch)の一部として括れられ、明確に台湾と区別されている⁽⁷¹⁾。また、朝日新聞記事(2015 年 9 月 18 日)によると、Adolf Stieler が 1804 年に作った地図 CHARTE も現存しており、そこに Haopin-su、Hoang-uei-su、Tsheu-yusu の三島が琉球と同じ黄色に塗られ、無色の台湾との間は線で仕切られている⁽⁷²⁾。Stieler's Hand-Atlas と言えば、戦前のドイツの代表的な地図帳で、この地図もラ・ペルーズの航海図を基に作られたようだ。ともあれ、海洋大国であったイギリス・ドイツで発行されたこれらの地図は、当時の領土関係を比較的正確に反映したと評価され、尖閣諸島が台湾の付属島だとする中国側の主張を覆すものだ。

注

- (1)許雪姬・吳密察等主編『先民的足跡——古地図話台湾滄桑史』南天書局有限公司、1991 年、125 頁。
また、呂理政、魏徳文主編『経緯福爾摩沙 16～19 世紀西方繪製台湾相關地圖』国立台湾歴史博物館、南天書局有限公司、2011 年、22 頁、104～105 頁に同図が掲載されているが、着色は微妙に違う。国立台湾歴史博物館 List of the Collection of Maps (同書 164 頁)にある同図に「原著色」と注釈が付く。
- (2)黎蝸藤『釣魚台是誰的？釣魚台的歷史與法理』五南圖書出版股份有限公司、2014 年、口絵彩図 2、86 頁。デジタル資料：David Rumsey Map Collection, <http://www.davidrumsey.com>
- (3)鄭海麟『釣魚台列嶼——歷史與法理研究』明報出版社、2011 年、口絵 No.4。前掲『先民的足跡——古地図話台湾滄桑史』、139 頁。
- (4)前掲『経緯福爾摩沙 16～19 世紀西方繪製台湾相關地圖』、172 頁。前掲『釣魚台是誰的？釣魚台的歴

- 史與法理』口絵彩図4。ただし、後者の説明文に「1859年版」と記す。
- (5)劉江永『釣魚島列島帰属考：事実与法理』人民出版社、2016年、口絵図3-5、115頁。前掲『釣魚台是誰的？釣魚台的歷史與法理』口絵彩図3『経緯福爾摩沙16～19世紀西方繪製台湾相關地圖』37頁。
- (6)鞠徳源著『日本国窃土源流 釣魚列嶼主權辨』下冊、首都師範大学出版社、2001年、672頁、図50。
<https://antiquenauticalcharts.wordpress.com/portfolio/china-east-coast-hong-kong-to-gulf-of-liau-tung/> 劉江永前掲書、口絵図3-7、口絵図3-8、161～165頁。
- (7)デジタル資料：<https://www.loc.gov/search/?in=&q=coast+of+china&new=true>
- (8)前掲『先民的足跡——古地図話台湾滄桑史』、139頁。
- (9)同上、140～141頁。鄭海麟前掲書（34頁、144頁、245頁）は、この杜撰な注記を鵜呑みにした。
- (10)松本賢一編『南蛮紅毛日本地図集成』鹿島出版会、1975年、図版Ⅱ、図版Ⅲ。
- (11)同上、図版Ⅳ。
- (12)一例として、1585年7月にマカオより長崎へ渡るポルトガル船 Santa Cruz の航海日誌を見ると、「十四日……Lequeo pequeno に近在する Ilha Formosa を望見せり。……十五日……朝 Ilha Formosa の末端を見たり。……間もなく我が東方に別の高き陸地を見たり。これ乃ち三王諸島を意味する Ilha dos Reijs Magos なり」とある。ここで言う「Ilha Formosa」は台湾、「Ilha dos Reijs Magos」は宮古島か八重山を指す。岡本良知『改訂増補十六世紀日欧交通史の研究』原書房、1974年、229頁を参照。
- (13)曹永和著『台湾早期歴史研究』聯経出版事業公司、1979年、296頁、図版1。
- (14)中村拓著『鎖国前に南蛮人の作れる日本地図』Ⅲ、東洋文庫、1967年、図XIV「LOPO HOMEM 平面世界図」、21～22頁。前掲『南蛮紅毛日本地図集成』図版Ⅷ、図版Ⅸ。
- (15)オルテリウス『世界地図帳』（ライデン大学図書館蔵1570年刊初版本複製）臨川書店、1991年、「世界図」fol.1、「アジア図」fol.3、「韃靼図」fol.47、「東インド図」fol.48。
- (16)Egom Klemp, *ASIA IN MAPS from Ancient Times to the mid-19th Century*: VCH, Acta Humaniora, 1989. No.60 「CHINAE」。
- (17)前掲『南蛮紅毛日本地図集成』、図版XXXⅡ。
- (18)秋岡武次郎編著『日本古地図集成』「欧州製日本図」、鹿島研究所出版会、1971年、No.73「アジア図」、No.71「インド付近図」。
- (19)ジョン・ゴス著、小林章夫監訳『ブラウの世界地図』同朋舎出版、1992年、No.84「アジア図」190～191頁、No.85「東インド」192～193頁、No.94「中国」210～211頁。
- (20)松本賢一編『欧州古版 日本地図集』十一組出版部、昭和18年、第47図、図版34頁。
- (21)ジェイソン・C・ハバード著、日暮雅通訳『世界の中の日本地図 16世紀から18世紀西洋地図に見る日本』柏書房、2018年、366頁、378頁、380頁。また、ベランの「日本及びカムチャツカ図」（1735年）も同じ図形。前掲『欧州古版 日本地図集』第48図、図版35頁。
- (22)ロツテル「アジア図」、同上、『欧州古版 日本地図集』、第52図、図版39頁。
- (23)織田武雄・室賀信夫等編集『日本古地図大成——世界図編』講談社、1975年、270頁。
- (24)同上、271頁。同図の1812年版として、天理図書館『西洋古版日本地図集』1954年、19図がある。
- (25)前掲『欧州古版 日本地図集』、第54図、図版41頁。
- (26)Egom Klemp 前掲書、No.64「Karte von Hoch-Asien (Blatt China)」。75葉の地図を収録したこのアジア地図集の中で、唯一尖閣諸島を表記した地図だ。
- (27)前掲『経緯福爾摩沙16～19世紀西方繪製台湾相關地圖』、106～107頁。
- (28)同上、116～117頁。

- (29) 「CARTE DE L'EMPIRE DE LA CHINE」 山陽学園大学図書館所蔵世界古地図 No.1。
- (30) ヨーゼフ・クライナー「ヨーロッパ製地図に描かれた琉球」。ルッツ・ワルター編『西洋人の描いた日本地図—ジパングからシーボルトまで』OAG・ドイツ東洋文化研究協会、1993年、75頁。
- (31) 矢沢利彦訳「シナ人が琉球諸島と呼ぶ諸島についての覚書」。東洋文庫 251『イエズス会士中国書簡集』5紀行編、平凡社、1974年。
- (32) ゴービル「琉球諸島図」、前掲『西洋人の描いた日本地図』163頁。また、ゴービルが1751年から断続的にパリに送ってきた書簡を情報源に、フランス地理学者 Philippe Buache (1770~1773) が1754年に「Carte du Royaume et des Isles de Lieou-Kieu」(琉球図)を刊行したが、尖閣関連の表記は「琉球諸島図」の二番煎じに過ぎない(同上、162頁)。他に1832年発行の「Cart des Iles Rioukiou」(琉球群島図)も現存している。こちらは、パリ大学教授を務める東洋学者 Klaproth Heinrich Julius (1783~1835) が、林子平『三国通覧図説』(1785年)を仏訳した琉球研究書の掲載図で、『三国通覧図説』の「琉球三省並三十六嶋之図」に描かれた尖閣諸島や航路を真似たものである。結局、ゴービル「琉球諸島図」、プチャーシュ「琉球図」、クラブロート「琉球群島図」の三点とも出処が同じだ。国立台湾博物館主編『地図台湾—四百年來相關台湾地図』南天書局有限公司、2007年、76頁。
- (33) 「CARTE DE L'EMPIRE DE LA CHINE」 山陽学園大学図書館所蔵世界古地図 No.2。同図は、前掲『経緯福爾摩沙 16~19世紀西方繪製台灣相關地圖』159頁にも掲載されている。
- (34) 「Karte von den Eylanden von Japon und der Halbinsel Corea, Nebst den Chinesischen Küsten von Peking bis Canton」 山陽学園大学図書館所蔵世界古地図 No.3。同図は、『経緯福爾摩沙 16~19世紀西方繪製台灣相關地圖』98~99、156頁にも見えるが、着色は異なり、年代も1770年と記す。
- (35) 「China and Japan」 山陽学園大学図書館所蔵世界古地図 No.4。
- (36) 「A NEW MAP OF THE CHINESE EMPIRE WITH JAPAN AND KOREA」 山陽学園大学図書館所蔵世界古地図 No.5。
- (37) Egom Klemp 前掲書、No.6「Cantino World Map,1502」。
- (38) 同上、No.8「Diogo Ribiro Carta Uniuersal,1529」。もっとも、ポルトガル人の「琉球発見」は1516年のことという説もある。Egom Klemp 前掲書、XY「前書き」(The History of the Discovery of Asia and its Depiction in Maps)を参照。
- (39) 中村拓前掲書、図 XVI「DIOGO HOMEM,1558.亜細亜図」、25~26頁。XV「DIOGO HOMEM,1558.平面世界図」23~24頁。前掲『南蛮紅毛日本地図集成』、図版 XI、図版 XII、XIII。
- (40) 同上中村拓前掲書、図 XXI「BARTHOLOMEU VELHO,1561.世界図」、35~36頁。
- (41) 同上中村拓前掲書、図 XXXVII「LAZARO LUIZ,1563.東亜図」、54頁。
- (42) Egom Klemp 前掲書、No.50「South-East and East Asia,1621」。
- (43) 同上、No.35「Oost Indien,ca.1660」。
- (44) 前掲『南蛮紅毛日本地図集成』、図版 LXII、図版 LXIII。
- (45) 前掲『経緯福爾摩沙 16~19世紀西方繪製台灣相關地圖』、70~71頁。
- (46) 前掲『釣魚台列嶼—歴史與法理研究』、235~238頁。
- (47) 大阪府立図書館編『南方渡海古文献図録』小林写真製版所出版部、昭和十八年、第一図「末吉孫左衛門東亜航海図」、第三図「糸屋随右衛門東亜航海図」。
- (48) 前掲『日本古地図大成—世界図編』、45「航海古図」116頁、50「小加呂多」126頁。
- (49) 同上、51「東洋南洋航海古図」(盧草拙旧蔵)127頁。前掲『南方渡海古文献図録』、第五図。
- (50) 中村拓著『御朱印船航海図』(原書房、昭和54年、31~32頁)によると、全部で12点ほど現存。

- (51)『寛文航海記』(1670年代)の「日本ヨリ呂宋へ高砂之東前乗事」を見ると、長崎を出た船は男女群島の女島から「レイシ嶋」「ヨナヨ嶋」「タハコ島」「筆架山」を経てルソン島へ渡る航路を記載している。「レイシ嶋」は、レイス=Reys Magos=石垣島に比定されるが、尖閣諸島とする見方もある。ちなみに、「ヨナヨ嶋」は与那国、「タハコ島」は台湾の蘭嶼、「筆架山」はバブヤンを指す。前掲『南方渡海古文獻図録』、第十一図「航海記」。石井望『尖閣反駁マニュアル』集広舎、2014年、403～408頁。
- (52)前掲『南蛮紅毛日本地図集成』、「南洋鍼路図」図版 XLV II、XLV III。「西洋鍼路図」図版 XLIX、L。前掲『日本古地図大成—世界図編』、55「東亜航海図」134頁。
- (53)前掲『先民的足跡—古地図話台湾滄桑史』、132～133頁。
- (54)吉田俊則訳『プロトン北太平洋航海記』東洋書店新社、2021年、口絵1、2、航海日誌176頁。
- (55)ラヴ・オーシュリ、上原正稔編著『青い目が見た大琉球』ニライ社、2000年、14～15頁。
- (56)前掲『経緯福爾摩沙16～19世紀西方繪製台湾相關地図』、112～113頁。
- (57)国立歴史博物館編輯委員会『美麗之島—台湾古地図與生活風貌展』、2003年、51頁。
- (58)サマラン号による先島測量の経緯について、球陽研究会編『球陽—原文編』21巻「尚育王11年」(角川書店、1974年、477～478頁)。前掲『異国船来琉記』「アダムスの那覇見聞録」。また、山下重一著『続琉球・沖縄史研究序説』(御茶の水書房、2004年)第二章「英艦サマラン号の琉球・長崎来航」。
- (59)「CHART SHEWING THE TRACKS OF H.M.S.SAMARANG.」(1845年サマラン号航海日誌附図)、前掲『釣魚島列島帰属考：事実と法理』、157頁。黎蝸藤前掲書、130頁。
- (60)「中国東海沿岸自香港至遼東湾海図」、前掲『日本国窃土源流—釣魚列嶼主權辨』下冊672頁、図50。
- (61)吉田東伍編著『大日本地名辞書』第六卷第二部「台湾」、富山房、1939年、26頁。
- (62)台湾省文献委員会編『台湾省通誌』卷一土地志・疆域篇、第一冊、1970年、10頁。
- (63)南方同胞援護会機関誌『季刊沖縄—特集尖閣列島』第56号、1971年、184～190頁。
- (64)ちなみに、明治42年(1909)9月発行の大日本帝国陸地測量部『東亜輿地図』「台北」を見ると、「尖閣群島」「和平山」「チアウサ島」「ラレイ岩」と記されている。
- (65)王徳均述『澎湖海道図説』、王錫祺輯『小方壺齋輿地叢鈔三補編』九、西冷印社、2004年。
- (66)王徳均述『朝鮮海道図説』、同上『小方壺齋輿地叢鈔三補編』十一。
- (67)陳寿彭訳『新訳中国江海險要図誌』(三)台湾広文書局、1969年、708～710頁。
- (68)同上、『新訳中国江海險要図誌』(一)、55頁。
- (69)F.L.Hawks 編集『ペリー艦隊日本遠征記』Vol. I、栄光教育文化研究所、1997年、482頁。なお、『ペリー艦隊日本遠征記』附図 CHART OF THE COAST OF CHINA AND OF JAPAN ISLANDS を見ると、KUROSIWO(黒潮)の真ん中に Hoapinsu、Tiausiu、Raleigh R^k 三島が描かれており(同上、収録海図 No.2)、報告書「水路誌と航海上の所見」にも「香港から琉球に向かうには、……ホアピンサン、ティアウス、ローリー・ロックの北を通過するように針路を取り」と記している(同上 Vol. II、373頁)。しかし、台湾地図にはそれがなく、ペリーらが尖閣諸島を台湾の附属島嶼として見做していない証左だ。
- (70)前掲『経緯福爾摩沙16～19世紀西方繪製台湾相關地図』、118～119頁。
- (71)<https://japan-forward.com/japanese/59957/>
- (72)シュティラー地図の違うバージョンについて、前掲『尖閣反駁マニュアル』表紙・扉・363頁・373頁に紹介がある。<https://kaiunmanzoku.hatenablog.com/entry/2017/12/29/222454>

附記：本論文は、山陽学園大学令和3年度学内研究補助金によって進められている研究成果の一部であり、ここに記して感謝の意を表す。